

聖 書：マルコの福音書 9：2～13

説教題：彼の言うことを聞け

日 時：2025年12月7日（朝挙）

今日の箇所は前の部分と深くつながっていますので、少し前回の内容を振り返って始めたいと思います。前回イエス様は初めて「受難予告」をされました「あなたがたはわたしをだれだと思いますか」という問い合わせに対して十二弟子の代表ペテロが「あなたはキリストです」と告白しました。それを受け伊エス様は、ではキリスト、メシアとは何を意味するのか、メシアはどうやって罪人を救うのか、その鍵となる「受難」について語り始めました。ところがペテロはイエス様を脇へお連れしていさめ、イエス様から「下がれ、サタン。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている」と叱責されました。そしてイエス様は「だれでもわたしに従って来なければ、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい」と言われました。思わずひるんでしまいそうな言葉です。しかし、もしこの言葉を退けて自分のこの世のいのちを保とうとするなら、その人は永遠のいのちを失い、反対にイエス様のためにこの世のいのちを失うことも厭わない人は、まことのいのちを得ると言わされました。さらにイエス様は、やがて父の栄光を帯びて来られる再臨の日には、イエス様を恥じて従わなかつた者をイエス様も恥じ、反対に十字架を負うことを恥とせず従つた者は御国に迎え入れられるということが語られました。そして9章1節でこう言われました。「まことに、あなたがたに言います。ここに立っている人たちの中には、神の国が力をもって到来しているのを見るまで、決して死を味わわない人たちがいます。」 十字架を負つてイエス様に従う歩みの先には栄光がありますが、それは最後にならなければ分からぬものではありません。むしろ主に従う者はこの世においてもその歩みの中で神の国が力をもって到来するのを味わい始めることができます。この約束の最初の成就が今日の箇所に記されている出来事であると言えます。

この日、イエス様はペテロ・ヤコブ・ヨハネの3人だけを連れて高い山（おそらくヘルモン山）に行かれました。すると彼らの前でイエス様の御姿が突然変わりました。ルカの福音書の平行記事では「御顔の様子が変わり」と記され、マタイの福音書の平行記事では「顔は太陽のように輝き」と記されています。そしてこのマルコの福音書では「その衣は非常に白く輝き、この世の職人には、とてもなし得ないほどの白さであった」と記されます。地上のものとは比較にならない天的な輝きだったことが強調

されています。

さらに4節には「また、エリヤがモーセとともに彼らの前に現れ、イエスと語り合っていた」とあります。何を語っていたのでしょうか。ルカの福音書によれば「イエスがエルサレムで遂げようとしている最期」、すなわち十字架とその後のことについてでした。マルコはそこまでは書いていませんが、モーセは律法を、エリヤは預言者を代表します。旧約を代表する二人がイエス様と話していたということは、旧約聖書が指示して来た方こそイエス様であるということを暗示するでしょう。そしてその預言がいよいよイエス様によって成就されて行くことを語り合っていたと考えられます。

この光景を見てペテロが語った言葉が5節にあります。「先生。私たちがここにいることはすばらしいことです。幕屋を三つ造りましょう。あなたのために一つ、モーセのために一つ、エリヤのために一つ。」この言葉をどう見るべきか、色々なことが言われます。イエス様・モーセ・エリヤに一つずつ幕屋を用意すると言つて三者を同列に見てしまった、あるいはこの栄光の場に三者をとどめておきたくて幕屋の提供を申し出た、などと。しかし6節に「ペテロは、何を言つたらよいのか分からなかつたのである」とコメントされていますから、あまり深読みし過ぎるのは的外れです。ペテロらしく、黙っていられずに思わず口を突いて出た言葉だったと思われます。むしろ強調されているのは、その後の「彼らは恐怖に打たれていた」という点です。その恐れのためにペテロは良く考える間もなく、先の言葉を語ったのだと理解できます。

その時、雲がわき起きました。雲は神の栄光と臨在の象徴です。シナイ山で律法が与えられた時、幕屋や神殿が奉獻された時も、栄光の雲が満ちました。その雲が彼らを覆い、その中から声がしました。「これはわたしの愛する子。彼の言うことを聞け。」この天からの声、すなわち父なる神の声は、まずイエス様は誰であるかを明らかにしています。同じような言葉は1章11節、イエス様が洗礼を受けた時にもありました。「あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ」と。その時はイエス様ご自身に向けられた言葉でしたが、ここでは弟子たちに向けて語られた言葉になっています。「これはわたしの愛する子」と。こうして父なる神はイエス様がご自身の愛する子であることを弟子たちに確証されたわけです。そして「彼の言うことを聞け」と言われました。弟子たちが見回すと、そこに残っていたのはイエス様だけでした。モー

セもエリヤも姿を消していました。つまり天の声が「聞け」と言われた「彼」とは、ただ一人残されたイエス様のことであるということになります。

では、この「彼の言うことを聞け」という声は具体的にどんなメッセージを語っていたのでしょうか。もちろんイエス様の言葉すべてを聞けということかもしれません。しかし文脈を考えると、もう少しフォーカスすべきポイントがあると思われます。それは特にイエス様の受難予告です。イエス様は前回初めてご自分の受難について語られました。多くの苦しみを受け、人々に捨てられ、殺され、三日目によみがえらなければならぬ、と。これを聞いたペテロは即座に反対し、そんなことがあってはならない！と言いました。十字架はつまずきであると聖書に言われている通り、ペテロはさっそくつまずいたわけです。「そんな話は受け入れられない！について行けない！そんな話は嫌だ！」と。しかしイエス様はペテロを含む群衆に対して「だれでもわたしに従って来たければ、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい」と語られました。まさにこの「彼の言うことを聞け」ということです。この「聞け」とは単に耳で聞くだけでなく、従うことの意味します。その際、父なる神は「これはわたしの愛する子」と確証されました。ですからペテロたちは、受難について語られるイエス様は神の御子であり、だからこそこの方の言葉に聞き従うように！という上からのメッセージを受けたのです。そう言われて、そこに残っていたイエス様は、先ほどのように栄光に輝く姿ではありませんでした。華やかな見栄えがするわけではない、いつものイエス様です。その方に聞き従うべきなのです。

さてイエス様と弟子たちは山を下りて行きました。その時、イエス様は「人の子が死人の中からよみがえる時までは、今見たことをだれにも話してはならない」と命じられました。これまでと同じです。イエス様が栄光に輝いた姿だけを語れば誤った勝利主義・英雄主義を助長しかねません。人々の間にある武力的・政治的メシア像をあおりかねません。しかし十字架と復活を経た後なら、その意味を正しく理解できる。そのため、それまでは話さないように！と言われました。これを聞いた弟子たちは戸惑います。「死人の中からよみがえる」とはどういう意味か。弟子たちには、メシアであるイエス様が死ぬということ自体、到底受け入れがたいものでした。「なぜメシアが死ぬのか。どうしてイエス様は死ぬことになるのか」理解できなかつたのです。そこで弟子たちは尋ねます。「なぜ、律法学者たちは、まずエリヤが来るはずだと言っているのですか。」この質問のニュアンスを正確に読み取るのは難しいのですが、おそらく

くこういうことだったのでしょう。弟子たちは今、神の国の驚くべき現れに接しました。確かにイエス様において神の国は到来していると感じます。ならば完成はもう間近に思えます。しかし律法学者たちは「まずエリヤが来る」と言う。とすれば、この流れの中でエリヤはどう関わるのか。いつどのように神の救いのスケジュールに入つて来るのかという問い合わせました。さらに注解者たちが指摘するように、弟子たちの心には隠れた問い合わせもあったと思われます。それはこの後のイエス様の答えから逆に推測されることです。それはこういうことです。エリヤは確かにマラキ書の一番最後4章5～6節で、終わりの日の前に来ると言われています。そして「父の心を子に向けさせ、子の心をその父に向けさせる」と言わわれているように、人々の心を整えます。そのようなエリヤが先に来るのであればメシアが拒絶されるはずはないのではないか。メシアの死など起こり得ないのではないか。まして「死人の中からよみがえる」などということはなおさらではないか。弟子たちはそう考えていたのです。

これに対してイエス様は言われました。「エリヤがまず来て、すべてを立て直すのです。」　律法学者の言う通り、マラキ書の通りです。ポイントは次です。「それではどうして、人の子について、多くの苦しみを受け、蔑まれると書いてあるのですか。」弟子たちはエリヤが来ればメシアは苦しむ必要がないと考えていました。しかしイエス様は旧約聖書自体がメシアの受難をはっきり預言していると言われます。イザヤ書53章や詩篇22篇などがあげられるでしょう。つまりエリヤが来ることと、メシアが苦しむことは矛盾せず、両立するのです。どちらも聖書が語っていることなのです。弟子たちの理解の方が誤っているのです。そして13節でイエス様は言います。「わたしはあなたがたに言います。エリヤはもう来ています。そして人々は、彼について書かれているとおり、彼に好き勝手なことをしました。」　これは他の箇所からも分かりますように、バプテスマのヨハネのことです。彼こそエリヤの役割を持って来た人です。その彼はどうなったか。すでに見たようにヘロデの手によって殉教しました。つまりエリヤが来たからと言って、世の中が整い、メシアが拒絶されない状況が生まれるわけではないのです。エリヤ自身が殺されたのです！そのエリヤすなわち先駆者ヨハネがあのように殺されたのですから、メシアであるイエス様はなおさら、聖書に書いてある通り、苦しめられ、蔑まれるのです。イエス様は必ず受難を通るのです。そしてそれから復活するのです。

さて、以上の箇所は何を語っているのでしょうか。最初にも述べたように、この高い

山でのイエス様の変貌は、9章1節の約束の最初の成就であると考えられます。つまり十字架を負って主に従う弟子たちを励ますものです。彼らはこの世でも神の国が力をもって到来しているのを見る能够と言わましたが、そのことが現にここに起こったのです。ですからこれは8章38節で語られた、栄光を帯びたイエス様の再臨の前触れであり、前味です。この出来事が主の再臨の前触れとしての意味を持つことはペテロの手紙第二1章16～18節でも言われていることです。ペテロはそこでこう記しています。「私たちはあなたがたに、私たちの主イエス・キリストの力と来臨を知らせましたが、それは、巧みな作り話によつたのではありません。私たちは、キリストの威光の目撃者として伝えたのです。この方が父なる神から誉れと栄光を受けられたとき、厳かな栄光の中から、このような御声がありました。『これはわたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ。』私たちは聖なる山で主とともにいたので、天からかかったこの御声を自分で聞きました。」　このようにペテロは、今日の箇所で私たちが読んだ、高い山における主の変貌の出来事は主の再臨を指し示し、保証するものだと言っています。つまりこれは来たるべき神の国の栄光の一端を弟子たちに垣間見させ、彼らを奮い立たせるための神のみわざだったのです。

しかし同時に今日の箇所が教えていることは、だからと言って十字架への道が回避されるわけではないということです。イエス様は短い間、山の上で栄光の内にありましたが、そのまま栄光へと吸い上げられたのではなく、山を下り、十字架へ向かわれました。イエス様の先駆者であるヨハネもすでに殉教しました。そうであるからにはイエス様も遠からず本格的な受難に向かつて進まれます。このようにご自身の受難について予告し、またその道に歩み、またそれと同じ道に弟子たちも従うよう招いている、そのイエス様の言うことに聞き従うように！と天からの声は語っていたのです。

私たちはどうでしょうか。イエス様を信じ、従うと言ひながら、人間的に「いいとこどり」だけをしようとしているのでしょうか。祝福や栄光の教えには心惹かれる一方で、十字架や苦難の話が語られると、ペテロのように心を閉ざし、「そんなことは嫌だ」「聞きたくない」という態度になることはないでしょうか。もしそうであれば、「彼の言うことを聞け」という天からの声に従っていないことになります。しかし今日の箇所は、受難予告をされた主に従つて自分の十字架を負う歩みは決して空しいものではないと教えています。苦難を経て、栄光があります。バプテスマのヨハネもそのことによって大丈夫なのです。主の先駆者としてこの世の命を失いましたが、主と同じ

道を歩んだ者として、今日示されたその栄光にあずかっています。それに續いてイエス様ご自身も私たちの身代わりに十字架上で尊い命をささげる贖いのみわざを成し遂げ、栄光へと入られました。では、この道を進むようにと言われている私たちは、自らの十字架を負ってイエス様に従っているでしょうか。

イエス様は「神の国が力をもって到来しているのを見る」と言われましたが、それは今日の出来事の後、イエス様の復活・昇天・ペンテコステの聖靈の注ぎ、さらには全世界への福音宣教において一層豊かに示され、成就していると言えるでしょう。私たちもイエス様のことばに聞き従い、自分の十字架を負う歩みの中で、神の国の力の一端を味わうことができる者とされています。

イエス様はこの後も、ご自身の受難について語り、そのご自身に従う歩みへと私たちを招かれます。「その彼の言うことを聞け」との天からの声に従い、つまずかず、教えをえり好みせず、主の語ることすべてを受け取って歩む者でありたいと思います。そして歩みの中で神の国の前味を味わいながら、今日の箇所に示された、この世のものをはるかに超えた栄光にあずかる者とされることを望みつつ、主に従う歩みを強められて行きたいと願います。